

環境学の

授業拝見!

理学、工学、人文社会科学、異なる専門領域の学生
がともに学ぶ環境学研究科ならではの授業です。

【今回の授業】**建築デザイン実習** 都市環境学専攻 堀田 典裕 准教授

人間の様々な生活行為にかかわる空間を創造する建築学。都市環境学専攻建築学系の学生たちは、その対象領域を建築単体から都市へ、環境全体へと広げ、計画・歴史、環境・設備、構造・材料の3つの分野からなる「総合知」としてデザインを学んでいます。その中で主に計画・歴史の学生が学ぶこの授業は、建築設計教育の集大成ともいえるべきもの。学生時代のポートフォリオの中心となる作品をめざして12人の受講生が奮闘しています。

底流にあるのは「今の時代に考えなければいけない建築の在り方とは何か」という問い。

今回は、福岡県の水郷柳川で水路と商店街の持続性を考えるための「建築的鍼療法 (Architectural Acupuncture)」を問う課題となりました。現地を観察して建築・都市の変容について形態分析を行った結果を、現地の専門家と商店街の方々に提示。ここで得られた様々な意見を基に、対象とする敷地とプログラムを決めて、各自のアイデアをスケッチと図面と模型で形にしていきます。その過程で学生が教員と納得のいくまで繰り返されるのが「エスキス」と呼ばれる質疑応答。網目のように張り巡らされた水路と商店街の結節点に何を読み取り、将来に向けて何を遺し、何を取り壊し、何をどのように設けるべきか。12人12通りの設計案が提案されます。「なぜこの場所でこの形なの?」「この形の構造はどうするの?」「この形に関連する過去の作品を見た?」。エスキスで相対する堀田先生。「まるで千本ノックを打っているよう」と言います。「『総合知』としてデザインをまとめることができるようになるには、理性と感性の対話を繰り返すしかありません。目で見て、耳で聞いて、手で描いて模型をつくって、自分の言葉で話す。とにかく諦めずに続けてほしい」。授業は最終講評会で、各自の設計案を柳川商店街の関係者にプレゼンテーションする日を迎えます。

柳川での調査

柳川で行った建築デザイン実習では、数日にわたり現地を調査することができたので、名古屋に比べてより田舎らしい日本の風景に触れる素晴らしい機会となりました。日本の学生たちの意欲には非常に感銘を受け、それは間違いなく大きな刺激となりました。他の日本人学生の作業を見学し意見交換したことは、ヨーロッパと異なる建築的思考を理解する上で大いに役立ちました。言葉の壁はありましたが、結局のところ、建築というものはあらゆる言語で通じ合うものだと思感しました。こうした経験が、今後の自らのデザインに深いインスピレーションを与えることは間違いありません。出会った人々、そして機会をいただいた先生方に、心から感謝しています。

Eliška Medřickáさん

エリシュカ・メドジツカ

都市環境学専攻
博士前期課程1年

今回の演習では、水網都市「柳川」の市内にかかる小さな橋143基を網羅的に調査しました。その中で、こうした小さな橋は、単なる交通のためのインフラではなく、人々の生活のための「場所」でもあるということに気づきました。この小さな気づきを起点として、中世ヨーロッパの「家橋」を学び、それを建築デザインとして展開し、旧城下町の玄関口として整備する計画を立てました。

橋を人々の生活のための場所として考える感性と、歴史的な家橋を現代的に再解釈する知性の間で建築デザインを考える設計手法は、今後の制作活動において大きな糧になったと思います。

西川 莉功さん

NISHIKAWA Riku

都市環境学専攻
博士前期課程1年